

高鷲の地名（2）

鷲見大鑑に載っている歴史地名地名

鷲見大鑑とは、平安時代末から安土桃山時代にかけて、鷲見郷を治めた鷲見氏の活躍についての歴史を記載した江戸時代中頃に書かれた古文書です。

その内容は、裕孝司氏所蔵の鷲見大鑑によると「鷲狩り伝説、鷲退治後の歴史、八幡城の戦い、その後の鷲見城、朝鮮陣の事、鷲見長門守の御料理の事、独礼並びに御紋御免の事」となっているが、鷲狩り伝説を中心に書かれ、多くの歴史地名が出てきます。その一部を紹介します。高鷲以外の地名では、「奈ヶ良」（岐阜市長良）、「八幡」、「小野八幡神社」、「神路」等の地名が出てきますがこれらは省略し、高鷲（鷲見郷）に関する地名だけを高鷲文化財保護協会発行の『たかす・鷲見郷物語』に基づいて紹介します。

鷲狩り伝説

「小二声・大二声」・・・鷲の鳴き声がかすかに聞こえ、さらに3丁ばかり進むと確かに二声の鳴き声が聞こえました。権守様はこの谷の奥深くに鷲の巣があるに違いないと思われ、この小二声、大二声という所で休憩されました。

「大城」・「羽落」・・・さらに谷深い山の奥に上られると、不思議なことに鷲の羽根が二羽根落ちていたのを発見され、これを拾われました。それ以来この地を大城・羽落と言います。

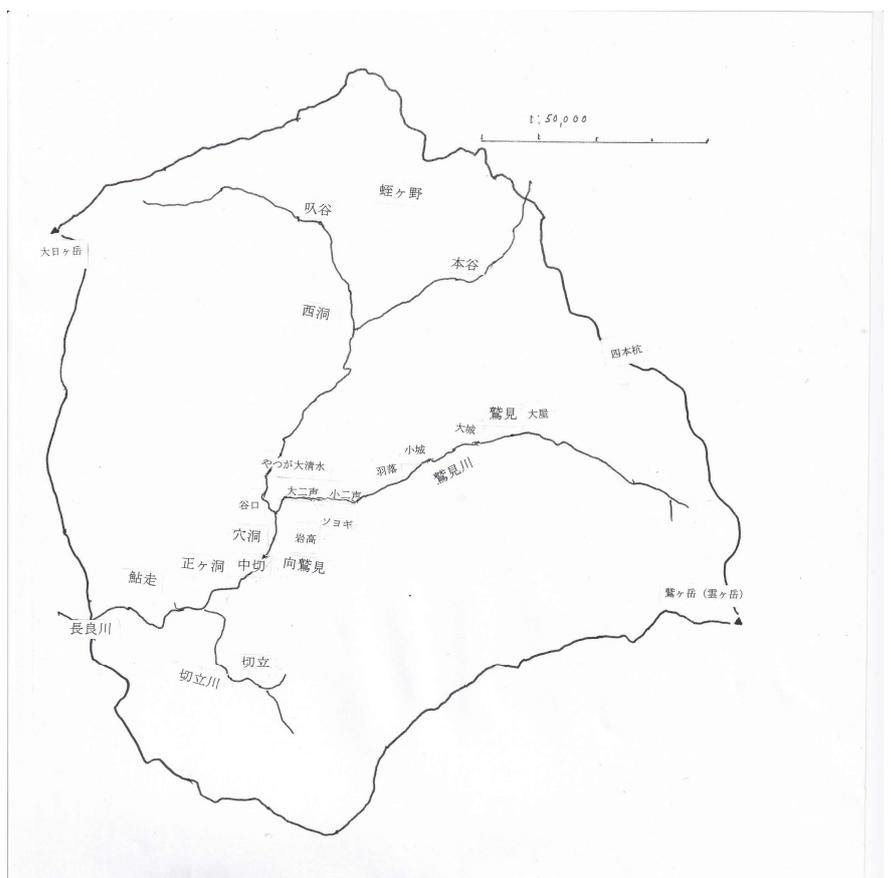
「下屋どこ」「七暗がり」「谷口」「岩高村」「向鷲見村」・・・小左衛門の案内で下屋どこと言うところから尾根伝いに七暗がり、谷口を通過して岩高村に帰られました。その時からこの地を向鷲見村というようになりました。

「やつが尾大清水」・・・権守様大変喜ばれ、人足 64 人と小左衛門と共に一緒に登られて、やつが尾大清水という所に大きな庵を作られました。

「雲ヶ嶽」「大屋」・・・それから人足立ちに雲ヶ嶽への道を切り開かせ、いよいよ 5 月上旬にお登りになりました。現在、大屋というところはこの所です。

八幡城の戦い

「鷲見川」「ソヨギ」・・・鷲見川と上の谷は大水となり、鷲見川の出会の所で軍勢は立ちすくんでいて、市左衛門は小さな谷で水も深かったのですが、馬に乗って向の岸に渡りました。それを見て兵達は、一斉に我も我もと向こう岸に泳いで渡りました。そのときからここを「惣およぎ」と言うようになった。



高鷲村の伝承と地名

(記事は、1998年発行の「郡上遊悠会」11号に載っている上村正隆氏の文章の再掲)

「ひるがの」「大日ヶ岳」・・・養老元年6月7日、越前の大徳泰澄大師が白山開路の道を求めんと、小洞より道を辿って大日ヶ嶽に登られ、頂上で一夜野宿の夢の中に、大日如来が現れ「われは」白山妙理大権現の本地なり、この山にありて年を経て汝を待つこと久し」との垂示があったため、大日如来を奉られると時を同じくして大日ヶ岳の名が起こったわけである。そして野に下られると、広漠たる野のただ中に大きな池があり、蛭が数多く浮遊していたというところから、「ひるがの」と命名されたということである。この「ひるがの」には御手洗(みたらい)、見違(みたがい)、案じヶ峰(あんじがみね)という地名も残っている。「ひるがの」の東南、飛驒との境には「いきぬき谷」という、太平洋側と日本海側に雨の量によって流れる方向を違える谷の地名がある。

「釜ヶ洞」「ハゲ」・・・釜ヶ洞は昭和20年代後半までは山間に農林業を営む数戸の集落があった。釜ヶ滝のある在所を釜ヶ洞。釜ヶ滝は泰澄大師が水垢離を取られた由緒ある滝とか。

折立地区は地質学上断層地帯に触れているとか。地元の人たちが呼んでいた「ハゲ」は天正の地震の際、地殻変動によって生じた断層ではないか、「下羽髪」「建ハゲ」「赤ハゲ」「蔵ハゲ」「常堂ハゲ」など幾つかの断層を周辺の見ることができる。文禄年間に入ってようやく復興の鍬がこの地に入れられた。数戸の集落が形成され人々の営みが始まった。堀立てて造られた場所の「堀り立」が、いつしか「折立」となった。

「西洞」「神中」・・・西洞の西側は陰阻な節谷に阻まれ、東は犬つげと湿原の野が阻み、背は大日ヶ岳の山麓に遮られている。旧白川街道より眺めれば、大日ヶ岳の山ふところの西の洞。天正元年一乗谷の朝倉氏が織田信長に攻め滅ぼされた際、燃えさかる城を脱出した姫が落ち延び、辿り着いたというのが西洞の法蓮寺という。その墓石らしきものが、西を望める丘の上に苔むしてある。

神中は村の草分け朝日助左衛門が村を鎮めるため、神中川のほとりに奉った白山神社が起源である。

「正会」(しょうがい)・・・江戸時代の豪農、鷲見忠左衛門は中洞に居住しすこぶる富裕であった。忠左衛門の祖先は越前の阿久鉦山が繁盛していた頃、かなやま紺屋を営んでいてこの地に移住した。文化年間、山野を開墾し水田を造った。忠左衛門新田の所以である。この開田した一帯を富田の里・正会と呼ぶ。高鷲村は一時期、富田村とも呼ばれておったこともある。

正会の地名の由来は永禄4年、白川郷の内ヶ島氏と八幡城主遠藤氏がここを戦の場にした。しかし双方共に事情があったのかお互いに引き上げてしまった。「ショウガナイデ、ショウダイ、ソウガエリ」と相成った。

「穴洞」・・・明治8年までは穴洞村と称していた。「伝伝九つ弥は四つ」と高鷲村の民謡にあるが穴洞は同族の集団で、伝のつく家系が八戸と計17戸。穴洞開拓の歴史は平安時代の後期、天慶年中の平将門の乱にさかのぼる。関東より逃れてきた平良忠という者が住み着いたとされている。地名の由来は、泰澄大師が大日ヶ岳登頂の途中「あの洞」とのたまいしを、後の人が穴洞というようになった。

「中切」・・・明治8年まで「中切村」と称し、また中桐とも書いた。この年に向鷲見、穴洞、中切、正ヶ洞の四ヶ村が合併して大鷲村となった。地名の由来は穴洞と正ヶ洞の間に位置していたからといわれている。

「正ヶ洞」・・・白山登頂の道を探るために入村された泰澄大師が「小山に上り飛驒の谷に登山道を案じ給う。大師、初の洞、あの洞、穴洞、霧立の洞とのたまいしを、後の人、正ヶ洞、穴洞、切立と呼びたり。」また一説には「大師、蛭ヶ野より下を向けられて天王淵の河畔に立たれ、その景観の特に秀でていることを賞でられ、この清浄なる地に神まつらんやと天王社を建立なされ、清浄なる洞、後の人、正ヶ洞と改めた。